



2022年3月

編集者からのメッセージ

第36号を迎えたINMPニュースレターは、1992年にイギリスのブラッドフォード大学で開催された第1回「国際平和ミュージアム会議」をきっかけに、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン氏が中心となって、長年にわたって続けてきた活動の上に成り立っています。その創刊号でピーターさんは、「このニュースレターの主な目的は、アイデアや情報の交換を通じて、世界中の平和博物館（現在は平和のための博物館）のつながりを強化することです。もちろん、これらの情報はまず皆さんからいただかなくてはなりません」。今日でもその目的は同じであり、このニュースレターが、読者の皆様からのアイデアを共有するためのハブとなることを目指しています。[このリンクをクリックすると、1992年までの全号のアーカイブをご覧ください](#)。また、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン氏によるアーカイブの総合的な索引も[こちら](#)で紹介されています。このデジタル版は、すべての平和構築者にとって、時代を超えた宝の山です。

編集部は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士が国際社会に残してくれた平和活動の遺産に感謝して、この号を博士に捧げたいと思います。

本号をピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士に捧げたいと思います。ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士が私たちのネットワークとチームに与えてくれた平和活動の遺産に感謝します。

さて、新編集部による創刊号をご紹介できることを大変光栄に思います。このページには、平和のための博物館国際ネットワークのメンバーや、友人から寄せられた感動的な記事が掲載されています。

本号では、イスラエルとパレスチナの紛争で子どもを失った親たちが、非暴力による解決と平和な未来のために協力しているコミュニティ「ペアレンツ・サークル・ファミリーズ・フォーラム」の展示「68人の子供たち」を取り上げました。罪のない子どもたちの追悼イラストと、彼らの平和への呼びかけが、記事の中であなたを導き、世界中での様々な活動において私たち全員を鼓舞してくれますように。

私たちは、平和ジャーナリズムの現代的な基準を提供するために、5つのタイムゾーンを越えて活動しているボランティアチームです。1) 次号に掲載する記事、展覧会の告知、アート作品などのご提供、2) 読者や会員の拡大のために本ニュースレター（PDFまたはウェブリンク）を、関連する個人、機関、組織と共有する、3) ソーシャルメディアで投稿記事を共有する、4) 建設的なフィードバックを inmp.news@gmail.com まで送っていただく、といった形でご支援をお願いいたします。

37号の英語での投稿は、2022年9月の発行を目指し、7月1日までに inmp.news@gmail.com までお送りください。2022年9月の発行を予定しています。2023年以降は、私たちのキャパシティに応じて、毎年発行数を増やしていきたいと考えています。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。皆様の励ましが私たちの大きなモチベーションになります。

キヤ・キム (Kya Kim)

イラツチェ・モモイシオ・ アストルキアからの メッセージ

私は平和のための博物館国際ネットワーク (INMP) のコーディネーターとして、あらゆる種類の戦争や暴力に対して、この短い言葉、「戦争反対」をはっきりと叫び、現在戦争で苦しんでいる人々、あるいは過去に多くの逆境にもかかわらず、平和への大きな願いを呼び起こした人々と連帯したいと思います。

平和の文化、非暴力、人権を支持する活動、記憶は、日常的に保存、展示、教育、普及の仕事で、平和を支持して働く博物館の専門家のこの世界的ネットワークに意味と意義を与えるものです。

30年前(1992年)、ブラッドフォードに平和の文化の世界から、様々な大学から、いくつかの平和博物館の代表者が集まったとき、この小さなネットワークが、今日、世界の様々な地域から集まった多くの平和博物館とその専門家をつなぐ国際ネットワークに成長するとは、想像もできなかったでしょう。彼らは自分たちの知識を共有し、来場者に戦争の恐ろしさと無意味さ、そして戦争の記憶の必要性について明確な情報を広めています。戦争で苦しみ、忘れられてしまい、今日平和に暮らしたいと考える多くの人々の声を届けるために。

30年(1992-2022)の間には、多くの物語があります。多くの平和の遺産を守り、伝えていかなければなりません。しかし、それはしばしば困難な通常困難なものです。平和の道は通常困難であり、これらの博物館の多くは、ますます軍事化している社会で、多くの人々の苦しみにますます麻痺し、母なる地球の声に耳を傾け、敬意を払うことができない社会で、批判的でなくなっています。彼らのメッセージを広げるための援助や財政支援がほとんどなく、困難な道を歩むことが多いのです。

私たちは、INMPニュースレターのこの新しい段階を見ることができ、大変誇りに思っています。

このニュースレターは、通常メディアでは取り上げられないことのない、私たちの平和のための博物館のニュースを報道することにわくわくしている人々のチームによって運営されています。

今後、このニュースレターという重要な遺産が維持され、私たちのミュージアムが日々、多くの努力と困難を乗り越えて行っている素晴らしい取り組みを広めるために役立つことが、私たちの最大の心からの喜びです。

2022年は、ウェビナー、平和のための博物館国際ネットワーク30周年記念、2023年8月にウプサラで開催されるINMP国際会議(フレデンシユ主催)への準備のための新しいウェブサイトなど、多くの活動を行う重要な年となります。

イラツチェ・モモイシオ・アストルキアは、乗松・岡・聡子と共に、平和のための博物館国際ネットワークのコーディネーターを務めています。INMPコーディネーターへの連絡は、INMP coordinators@gmail.com へお願いします。



"68人の子どもたち" ペアレンツサークル - ファミリーフォーラム

ROBI DAMELIN ロビ・ダメリン 著

ペアレンツサークル・ファミリーフォーラム (Parents Circle - Families Forum) のパレスチナ人とイスラエル人の遺族は、決して癒えることのない心の穴の奥底にある真実を経験してきました。人生は決して同じではないということ、そして他の人々が苦しむのを防ぐために可能な限りのことをしなければならないということを理解しています。先の戦争は、前の戦争の繰り返しに過ぎず、より高性能の武器を使っただけで、パレスチナ人とイスラエル人の68人の子どもたちの命を奪いました。これらの子どもたちの多くは、逃げ場がなく、シェルターもなく、安全な場所ありませんでした。彼らの家族の痛みから、何か良いことがあるのでしょうか？ 時には息もできないほどの激しい痛み。もし私たちが殺害を止めなければ、死んだ子どもたちの家族にどれほどの憎しみと復讐が起こるのでしょうか。平和のために未来への希望がなければ、決して実現しないのです。

68人の思いやりのあるアーティストたちが、無意味に亡くなった子どもたち一人一人のために68枚のイラストを描き、「68人の子ども達」という展示物を作成しました。彼らは自分たちの痛みや悲しみを絵で表現したかったのです。ペアレンツサークルのメンバーは、この展覧会のキュレーターであり、多くの人々に子どもたちの追悼に参加するように促した人物であるオー・シーガル氏と会いました。その人の名を冠したイラストが思い出に残るという願いを込めていました。

繊細で胸に迫るものがあるイラストは、悲しいものや気分が落ち込むものばかりではありません。そこには優しさと理解があります。イラストレーターズウィークの一環として開催されたこの展覧会を見に来た人が、一枚の絵を持ち帰り、子ども部屋に飾ってくれることを願っています。

美しい装飾的なイラストとしてだけでなく、子どもは貴重であり、ペアレンツサークルのメンバー全員のメッセージである和解と非暴力の教育を受けることができるというメッセージも込められています。子どもたちには人間の命の尊さを教えることができます。



"68人の子ども達"より
Inbar Heller Algaziのイラスト

長年の活動の中で明らかになったことは、パレスチナ人もイスラエル人も喪失の痛みは同じであり、どのような墓であっても落ちる涙の色は同じであるということです。私たちの子どもたちは、墓から暴力をやめろと叫んでいます。きっと、別の方法を探すべき時なのでしょう。子どもを亡くした母親の目を見れば、どんなに楽しいことがあっても、常にそこにある悲しみがわかるはずです。

寛大なアーティストたちは、この展覧会の収益のすべてを Parents Circle - Families Forum に寄付しています。この資金は有効に使われることでしょう。私たちは毎年、パレスチナ人とイスラエル人の遺児のためのサマーキャンプを行っています。

「相手に対する恐怖心」から「友情」へと変化していく様子は、とても心温まるものです。キャンプが終わる頃には、子どもたちは家に帰りたがらなくなります。幼い頃に参加した子どもたちが今ではファシリテーターとなり、中にはヤングアンバサダーとして私たちのメッセージを伝えてくれる人もいて、とてもやりがいがあります。

私たちは、私たちを結びつけるものが私たちを引き裂くものよりもっとあることを発見しました。私たちは皆、人類という一つの家族の一員なのです。

展示された68点のイラストは、[こちらのリンク](#)からご覧いただけます。

ロビ・ダメリン氏は、イスラエルのスポークスマンであり、紛争によって近親者を失ったイスラエルとパレスチナの家族600人が集まり、和解と紛争の公正な解決を目指して共に活動する「ペアレンツ・サークル-家族フォーラム」のメンバーでもあります。



本号では、「68人の子どもたち」展のイラストを、各アーティストの名前とともに紹介しています。
私たちの平和構築の仕事の根幹をなすものを思い起こさせるために。
私たちの共通の人間性、そして希望を。



“ 聖なるもの、そして真剣にさせるもの 遺産博物館と平和と正義のための 全米記念館

記念碑の壁には、マヤ・アンジェロウの言葉が刻まれています。「つらいことであっても歴史はやり直すことができません。でも、勇気を持って向き合えば、それを繰り返すことはありません。」

ロイ・タマシロ：ROY TAMASHIRO

アラバマ州モンゴメリー（米国）にある平和と正義のための全米記念館と併設の遺産博物館は、米国初、そしておそらく唯一の人種差別テロの負の遺産に特化した平和のための記念館と博物館として2018年に設立されました。記念館と博物館は共に、奴隷にされた黒人の歴史と負の遺産について、証言し、真実を語り、記念し、考察するための神聖な空間として存在しています。INMPと平和のための博物館運動にとって重要なことは、民間の非営利法務団体であるEqual Justice Initiative「平等な正義構想」(EJI)とその創設者で、多くの人に高く評価されている公益法弁護士ブライアン・スティーブソンが、「平和のための記念館／博物館」という範疇の下で彼らの記念館と博物館の存在を自ら定義したということです。

平和と正義のための全米記念館は、800本以上の棺桶のような形の鉄柱を吊り下げて建築されており、その数は人種差別テロによるリンチが行われた全米の郡の数を示しています。この記念館は、1877年から1950年の間にリンチの犠牲となった4,400人の黒人の命に敬意を捧げるものです。その犠牲者は白人暴徒によって縛り首にされ、生きたまま焼かれ、銃殺され、溺死させられ、撲殺された男性、女性、そして子どもたちでした。



平和と正義のための全米記念館（左）、平和と正義のための全米記念館の敷地内に立つガーナ人芸術家KWAME AKOTO-BAMFO氏の彫刻「NKYINKYIMインスタレーション」（写真右）。（NKYINKYIMは「捻じられた」意味するアカン諸族の言葉。アカン諸族はガーナを中心にコートジボアール東部からトーゴにかけて住むアカン語を話す人々の総称。「捻じられた」という言葉には「人生の旅には様々な苦難や転機がある」という意味が込められており、そこからその文字は私たちに必要とされる「行動力、主体性、多才性」の象徴とされる。
（訳注）遺産博物館：奴隷化から集団監禁まで（写真右）。写真提供：ロイ・タマシロ（2021年11月）。

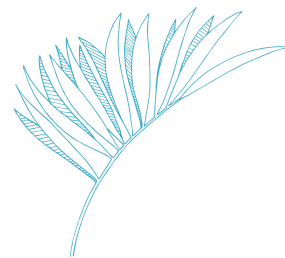
「遺産博物館：奴隷化から集団監禁まで」は モンゴメリーにある元倉庫にあり、それは何百人もの奴隷が閉じ込められ、競売にかけられるのを待っていた場所でした。最初の展示室では、18世紀から19世紀にかけての黒人の誘拐、人身売買、取引に関する話を伝える写真やビデオが展示されています。その他の展示室では、南北戦争後と黒人差別時代における奴隷化、人種隔離と差別、それらがさまざまな形で現れた事件の数々と、21世紀に至るまでの奴隷制と人種的不平等に関する米国最高裁判所の判決を含む年表が展示されています。

遺産博物館と平和と正義のための全米記念館は、アメリカ、そして世界中の人々が、黒人が酷使され、虐待され、残忍に扱われ、拷問されるのを見ても平気でいられるように、どのように文化的に同化させられ、社会の要求にどのように適合させられてきたかを記録し実証しています。これらの資料が明確に示しているのは、国民性の自意識の一部として埋め込まれた構造的暴力を正当化する物語です。この暴力は、歴史教科書、ニュースや娯楽メディア、大衆文学、文化的象徴やその他の象徴（美化され称えられてきた南部連合関係の銅像や記念碑など）、そして世論の中で強化されてきたのです。この暴力を当然のものとして受け入れるように私たちの多くを飼い慣らす物語が、どのようにして私たちが、人種差別テロが起こりその犠牲者が出るとい現象に対して、社会学的に無関心になり、快適に過ごすことができるようになるかということを理解する鍵となるのです。

遺産博物館と平和と正義のための全米記念館は、来館者に人種的不平等の恐怖の歴史と向き合う勇気を与えてくれます。この恐怖の歴史は今も、不協和音と痛みを伴う文化的な負の遺産として現在も続いているのです。この博物館と記念館の神聖な空間は、来館者が和解、贖罪、平和のための心の在り方について熟考することができるようにお手伝いいたします。

ロイ・タマシロ博士はウェブスター大学(米国)名誉教授。現在、INMPコーディネーター特別顧問、国際平和研究協会(IPRA)ニュースレターの編集をしています。

翻訳：赤松敦子



アウシュヴィッツ平和博物館（福島）

館長 小淵真理

アウシュヴィッツ平和博物館は来年20周年になります。それ以前、12年間に全国110都市で「心に刻むアウシュヴィッツ」巡回展を開催し、2003年に福島県白河市に常設館をスタートさせました。アウシュヴィッツの残された記録写真やポーランドの国立アウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館からお借りした遺品を通していのちの大切さや平和の価値を伝えてきました。国際ホロコーストデー（アウシュヴィッツ収容所の解放記念にちなむ日）、平和の夏まつり、他の催しも行っています。15周年には新作能「鎮魂」—アウシュヴィッツ・フクシマの能を上演し大成功を収めました。

東日本大震災と福島原発事故から10年が過ぎましたが、この間館の活動の半分は原発（核）と向き合うことになりました。アウシュヴィッツと原発は直接関係ありませんが、日本は世界で唯一の戦争被爆国であり核は持っていませんが原発がある限り核も製造できます。原発をなくすことは核戦争を禁止することに繋がると思います。

核兵器禁止条約が締結されましたが、日本は批准すらしていません。現実には世界には多くの核が保有されています。市民の力で核廃絶の道を目指していきましょう。

福島の復興は、表向きは進んでいるように見えますが人々は分断され、道半ばです。とにかく放射能被害は長期に及びます。現在最も懸念されているのは、汚染水（国は処理水と言う）の海洋投棄（国は海洋放出と言う）です。昨年、汚染水を海に流すことが決定され今年6月頃から工事が着工され、来年の春ごろには投棄予定です。国と東電は、原発敷地内にたまった汚染水タンクが一杯になり保管ができなくなるという事で海洋投棄を決めたのです。現存のタンクより丈夫で大きくする、モルタル固化し保管する、汚染水発生を減らす対策など専門家による研究や提言には耳を傾けず、一番お金のかからない海洋投棄としたのです。漁業関連だけでなく多くの反対の声があるにもかかわらず、国も東電も聞く耳を持ちません。



昨年、海といのちを守る福島ネットワークが立ち上がりました。汚染水の海洋投棄を止めることで「海」と「いのち」を守ることを目的としています。これ以上海を汚すことは地球環境を破壊することに繋がります。地球の「いのち」を守らなければなりません。しかし工事が始まってしまえば、私たちは沖縄の新基地建設阻止のために毎日座り込みをしているように、福島の間でも建設反対の座り込みを始めなければならなくなるのでしょうか。みなさまも、このことを注視し多くの方に発信をしていただければ嬉しいです。



アウシュヴィッツ平和博物館内の展示



From "68 Children"

SHIRAZ FUMAN

京都と空襲

井上力省

京都がアジア・太平洋戦争末期に空襲を受けたことはあまり知られていないのではないのでしょうか。1945年1月から6月にかけて京都は空襲を受けました。その中で、最大の被害を出した空爆が西陣空襲です。1945年6月26日午前、二条城に近い西陣地域は、米軍のB29爆撃機による空爆で死者43人、重軽傷者66人、罹災者850人をだしています。広島、長崎と同様、京都は米軍の原爆投下目標でしたが、1945年7月に投下目標から除外されたため原爆投下を免れたのです。

米軍は180の日本の都市を空爆する計画を立て、1945年8月15日までに66都市に対して戦略的な大規模空爆を完遂しました。その際、国宝であった名古屋城のほか、首里城、青葉城など8つの城が焼失しています。原爆投下目標都市に対して、米軍は戦略的な爆撃は控えていたようです。そのため、京都は東京や大阪、名古屋、神戸のような大規模な空襲を受けることはありませんでした。建物被害状況から(建物被害数/住宅建物数)極端に被害の少ない都市がわかります。東京は(58.5%)ですが、京都(0.3%)・広島(0.2%)・長崎(1.1%)・新潟(0.01%)・小倉(0.4%)です。この被害の差は原爆投下目標都市への通常爆撃がアメリカ側の命令で禁止されていたことによるとする研究があります。

京都は、大規模な空襲の可能性を残していましたが、そのまま8月15日の敗戦を迎えました。市民は、馬町空襲や西陣空襲を体験しましたが、原爆投下と大規模な戦略爆撃を免れました。空爆は人命、財産、伝統、文化、歴史、記録のすべてを破壊する愚かな行為です。地元の山中油店は爆弾の破片を展示し西陣空襲を伝えています。

空襲で市街地の大半を焼失し戦後再建された日本の都市を歩くと、目抜き通りは広く大木からなる街路樹は少ないことがわかります。京都市内の大通りは、空襲による火災拡大を防ぐため、民家を取り壊した建物疎開の結果であって、空襲で被災したことによるものではありません。しかし、残されたお寺や神社などの歴史的建造物や大きく育った樹木は、京都と空襲の関係を想起させ戦争の実相を伝えています。コロナの感染が終息し多くの人が安心して京都を訪問されることを願っています。

立命館大学国際平和ミュージアム・ボランティア
ガイド 井上力省



中央に展示された爆弾の破片（山中油店）筆者撮影

1945年8月6日の広島に関する展示物: 私たちに記憶を呼び起こすために 記憶とケアのコミュニティ

ウィルミントン大学平和資料センター長
ターニャ・マウス: TANYA MAUS



2021年春、ウィルミントンカレッジのコース「GL320: Hiroshima's Shadows (ヒロシマの影)」の受講生は、オハイオ州ウィルミントンにあるウィルミントンカレッジ平和資料センター (<https://www.wilmington.edu/prc/>)、日本の広島にあるワールド・フレンドシップ・センター、日本の東京にあるアーキビスト筒井弥生氏、カリフォルニア州サンフランシスコにあるアウト・デザイン・スタジオ (Aaut Design Studios: <https://findaaut.com/>)と協力し、バーチャル展示「1945年8月6日の広島に関する展示物ー 私たちに記憶を呼び起こすために記憶とケアのコミュニティ」 (<https://prc.museum.zone/gl320/>)を制作しました。

このコースに参加していた7人の学生のうち、4人は農業を専攻しており、残りの3人は運動科学かビジネスを専攻していました。彼らは1945年8月6日と9日に広島と長崎に投下された原爆の歴史についてはほとんど知らず、まさか大学時代に広島の実物を使って原爆に関するバーチャル博物館の展示物を作るとは誰も思っていなかったでしょう。

展示のヒントになったのは、平和資料センターの公文書館に展示されている広島原爆とその直後の様子を伝える、小さな木製の十字架、やさしくボロボロになった手作りの人形、瓦、少し曲がったコイン、小さな千羽鶴、破損した花瓶、モザイクタイルの箱のカバーなどの小さな遺物のコレクションでした。1990年代に作成されたキャプションには基本的な情報が記載されていましたが、具体的な出所を示す正式な収蔵記録はありませんでした。

より多くのバーチャルコミュニティと共有するためには、原爆投下の文脈の中で、これらの物がどのように作られ、どのような意味を持つのか、認識と知識を深めるための調査が必要でした。4ヶ月間のコースでは、さまざまな種類の木材とその用途や意味、太平洋戦争中の日本の硬貨の歴史、粘土製の屋根瓦への放射線の影響、戦前の日本の七宝焼の花瓶とそのエナメルなどを調査しました。また、姉妹センターである広島の世界・フレンドシップ・センター・イン・ヒロシマ (<https://www.wfchiroshima.org/english/>)と緊密に連携し、小さな木製の十字架の起源や、原爆投下直後に広島の小学生在が芸術作品を制作した動きについて理解を深めました。また、筒井さんの取り計らいで、埼玉の人形博物館と京都の陶磁美術館にも連絡を取りました。学生たちはデジタルデザイナーと協力して、展示物の外観やバーチャルな進行方法を考えました。

これらの問い合わせや、日本の関係者からの貴重なサポートの結果、この展示は、歴史と記憶への国際的な関りという、誰もが予想していなかったものになりました。学生たちにとっては、展示物が伝える非常に人間的な物語に加えて、「生きた歴史」という感覚があり、展示物が、原爆の苦しみが今日の日本にも影響を与えていることを認識するよう呼びかけていました。歴史と記憶は、意図的な協力と、過去の物語を現在に伝えるための深いコミットメントから生まれる共同作業であることを、私たち全員が認識したのです。

ターニャ・マウス（博士）は、米国オハイオ州南西部にあるウィルミントン・カレッジの平和リソースセンター（PRC）の所長である。クエーカー教徒の核廃絶運動家バーバラ・レイノルズは1975年にPRCを設立したが、1965年に広島に世界・フレンドシップ・センターを設立した人物でもある。バーバラ・レイノルズ記念アーカイブス（*Barbara Reynolds Memorial Archives*）があるPRCは、核戦争の体験に関する資料のコレクションとしては米国で最大級。Connect via [Facebook](#) and [Instagram](#).



写真提供はジェフ・ハイゼルデン氏による。 <https://quietspruce.com/>

テレンス・ウェブスター・ドイル博士の平和に関する授業 ロシア、サマラに平和の文化図書館を設立

VLADIMIR IONESOV

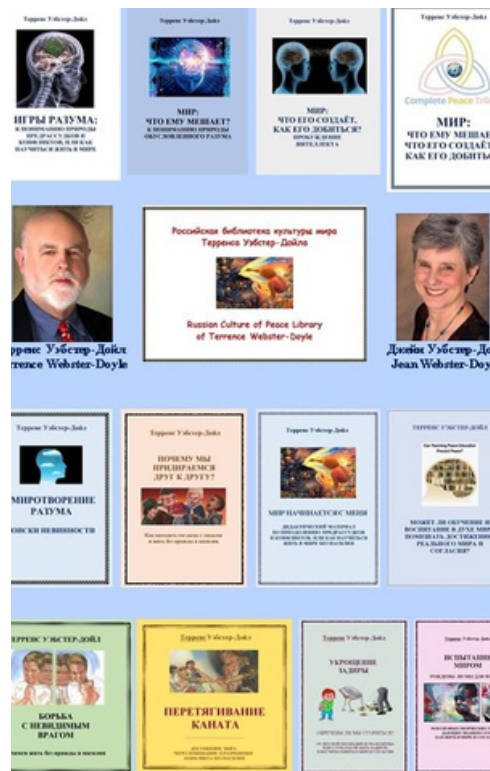
ウラジミール・イオネソフ

平和の文化を広めるためのさまざまな取り組みの中で、国際的な文化・教育プロジェクトである「テレンス・ウェブスター・ドイルによるロシア平和の文化図書館」の発表は際立っています。この図書館は、サマラ市とサマルカンド市の姉妹都市による大規模な文化・教育プログラムの一環として、サマラ市とサマルカンド市の人道主義者の人々とアトリウム協会（アメリカ合衆国カリフォルニア州に1984年に設立された平和教育団体）のアメリカ人協力者の人々との長期にわたる協力の結果、誕生したものです。現在、ロシア、イスラエル、およびウズベキスタンで展示されていて、今後、図書館をオンラインで利用する計画があります。

テレンス・ウェブスター・ドイルのロシア平和文化図書館は、認知平和教育の中核となっているアトリウム協会と、その文化・教育の実践の場であるアトリウム平和研究所・勇敢な新しい子ども平和博物館展示・条件付けられた心を理解するための教育・資料の膨大な平和創造に関する資料に基づいています。

このプロジェクトの特徴は、偏見や敵意を持たずに平和と調和の中で生きるための知識と技術を習得するための教育プログラムを備えた一般公開の図書館蔵書コレクションを作ることとを目的として、ロシア、アメリカ、ウズベキスタンの学者、教育者、公人、博物館関係者が集まったということです。アルメニア、ドイツ、イスラエル、チェコ、フランスから志を同じくする人々がこのプロジェクトに参加しています。研究論文、学習ガイド、ワークブック、実用ワークシート、ビデオ、アニメーション教材、インターネット上の博物館での発表資料、さらに絵葉書、ポスター、アルバムなどの出版物を含むこのコレクションは、主に旧ソビエト連邦の構成共和国で形成された国家連合の独立国家共同体や、ロシア以外でロシア語を話す読者を対象としています。

現在、テレンス・ウェブスター・ドイル博士の15の研究論文、教科書、実践ワークシートからなる書籍シリーズが、初めてロシア語に翻訳され、サマラで出版されています。数十年前、ロシアのこのプロジェクトに協力する人々とテレンス・ウェブスター・ドイル教授との協力がウズベキスタンで始まったのは、地元の教育者や博物館員のおかげであり、主にサマルカンドのエスペラント語学者の皆さんの無私の平和創造活動のおかげであることは注目に値します。アトリウム協会の多くの印刷物は、サマルカンドの平和博物館の展示の一部となりました。



ロシア平和文化図書館のポスター

2014年9月、テレンス・ウェブスター・ドイルの書籍は、第8回国際平和博物館会議（韓国・ノグンリ）で独立した展示コーナーで展示され、ノグンリ記念平和公園の図書館に収蔵されました。

会員の記事

T.ウェブスター・ドイルの著書は、平和への奉仕—抽象的なものではなく、具体的なもの—を示す優れた例です。著者が示すように、平和とは、与えられる可能性ですが、それは前提として与えられるのみであり、非難されるべき思考によって常に攻撃される可能性です。

今ここで必要とされているのは心の覚醒で、平和は数多くの終わりのない理論的構築は必要としていないのです。したがって、何が平和を生み出すのかを理解し、想像上の平和ではなく、現実の平和を実現する方法を理解することが重要なのです。

テレンス・ウェブスター・ドイルは次のように書いています。「私は、人々がなぜ永続的な平和を作り出し、互いに合意を見出すことができないのかについて、多くのことを考えてきた。そして毎回、国家と民族の関係における平和に対する主な障害は、主に偏見と先入観、恐怖と虚構、政治的野心と自己中心性であるという事実に立ち戻る。これらの障害は、私たちに敵を探させ、暴力を生み出すことを強いる。その犠牲となるのは、平和に暮らしたいと願いながらも、さまざまな偏見にとらわれてその方法がわからない人たちだ。

現在、ロシア、イスラエル、およびウズベキスタンで展示されていて、今後、図書館をオンラインで利用する計画があります。

このシリーズ（「テレンス・ウェブスター・ドイルのロシア平和文化図書館」）の選集は、近々ウズベキスタンやその他の国々の協力館に寄贈される予定です。これにより、この話題に関心のある読者が公共図書館でT.ウェブスター・ドイル博士の作品に自由に触れる機会を持つことができます。また、平和の文化、民族と文化の友好関係回復をテーマとした展覧会にも、これらの書籍が展示されることがあるかもしれません。

上記のロシア語版を含め、平和教育に関する広範な資料については、アトリウム協会のウェブサイトおよび関連リンク（下記）をご覧ください。

www.atrumsoc.org
www.bravenewchild.org
www.preventingwar.org
<https://biocogneticsedu.org>

ウラジーミル・イオネソフ（ロシア、サマラ国立文化
大学文化学・博物館・美術研究科教授）

翻訳：赤松敦子



テレンスの本を持って：国連平和デーにて

フランス、エスタンに「平和の家」「平和の庭」が誕生 ペトラ・ケプラー

PETRA KEPPLER

トゥールーズからほど近い南フランスの魅力的な村、エスタンでは、中世のメゾン・ド・ラ・ペ（平和の家）を改装した平和のアートギャラリーと庭園が最近オープンしました。ノーベル平和賞受賞者をはじめ、平和のために生涯を捧げた女性や男性に関する素晴らしい物語やピースアートを発見することができます。また、ロット川沿いの美しい風景や村々を楽しむために訪れる国際的なグループのために、ワークショップやミーティングを開催しています。中世の巡礼路として有名なサンティアゴ・デ・コンポステラ（スペイン北西部のガリシア地方、使徒聖ヤコブの聖地）がエスタンを通るため、1～2泊する人も多く、ペトラ・ケプラーら「コンコルドと平和」協会のメンバーが、夕陽を浴びる平和の庭でくつろいだらどうかと親切に誘ってくれます。この庭には、平和を追求し、促進するための平和機関やその手段についての情報パネルが展示されています。一年を通して、このようなコロナ禍でも、何千人ものフランス人観光客が、元大統領ヴァレリー・ジスカールデスタンの城へ向かう途中で平和公園の入り口を通ります。

ペトラは、そのような通行人に平和の庭に入り、平和の木にメッセージを残し、「平和は可能だ」というモットーに思いをはせてもらいたいと考えています。ペトラ・ケプラー（元INMP代表のピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士とともに）は、ベルタ・フォン・ズットナー平和研究所を設立し、平和主義者と平和の歴史について情報を提供しています (<https://peace-institute.com>)。



ペトラ・ケプラーは、INMP元コーディネーターのピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士と共にベルタ・フォン・ズットナー研究所を設立し、人々に平和主義者と平和の歴史について知らせています。

連絡先は、info@concordepaix.fr、郵便では2 rue du pont, F 12190 Estaing, Franceです。

"平和への道" カンボジア平和ギャラリー キャスペー・ギルス

CASPER GILS

カンボジア・ピース・ギャラリーは、戦争から平和へ、そしてポジティブな未来へと向かうカンボジアの近代史を伝える博物館です。

創設者であるソット・プライ・ガーム氏の当初のビジョンは、カンボジアの若い世代にポジティブな国家の誇りを持たせることでした。過去の過ちから学ぶだけでなく、カンボジアの和平プロセスをユニークな機会にしたポジティブな平和キャンペーンからも学ぶことができます。

国内の他の博物館が、共産主義政権下のポル・ポトの時代や1970年代の大虐殺に焦点を当てているのに対し、カンボジア・ピース・ギャラリーは、カンボジアの戦争からの復興、文化を通じた回復力、国民の和解に焦点を当てています。

2022年に予定されているわくわくさせるような展示のひとつに、CPCS(平和学紛争学センター)のエグゼクティブ・ディレクターでピースギャラリーの共同設立者であるエマ・レスリーのアイデアによる「平和への道」というものがあります。

この新しい展示では、1991年のパリ平和協定以前の10年間に、組織、グループ、個人が行ったさまざまな平和活動について、来場者に感じてもらい、考えてもらいたいと思っています。1980年代には、カンボジアで内戦を繰り広げていた4つの武装グループを一つにまとめ、平和的な解決策を交渉する試みが数多く行われました。重要なのは、1979年にポル・ポト政権が崩壊した後、カンボジアではさらに20年間にわたって内戦が続いたということです。

この間、成功した会議と失敗した会議がありましたが、どの会議も平和に向けての一步となりました。1991年のパリ和平協定への署名は、暴力的な紛争の終わりではなく、最も重要なステップの一つでした。



1989年、パリで行われた和平交渉での父ノロドム・シアヌーク国王とファン・セン首相。



1979年にカンボン・ソム（シアヌークビル）で行われた、カンボジアへの最初の本格的な西欧の援助物資の一つ。

私たちは、最も重要な「アイスブレイキング」やパワフルな会議の写真や資料を選び、本館の一角に展示を作りました。この展示はセクションに分かれています。セクションごとに、平和活動のさまざまな部分やテーマを紹介しています。

和平交渉や和平会議だけでなく、市民社会や国内のNGOの活動、カンブチア(カンボジア)の国際的な孤立を解消するためのキャンペーンに関するセクションもあります。カンボジアは、新しく設置されたカンボジア政府に圧力をかけるために、まず国連から緊急救援を拒否されました。1979年に共産党政権が崩壊した直後、わずかな国と外国のNGOだけが、国内の最も貧しい人々を支援することができました。

「平和への道」は、カンボジアではユニークな展覧会であり、来場者は和平プロセスがいかに複雑で多様なものであるか、また誰もが参加できるものであるかを考えさせられます。また、ポジティブな気持ちにさせてくれ、平和は常に可能であることを思い出させてくれます。

私はこれこそがピースギャラリーの本質だと信じていますし、私たちと一緒に活動している人々の献身と情熱からもそれが感じられます。

キャスパー・ギルス
カンボジア・ピース・ギャラリーのディレクター

カンボジア・ピース・ギャラリーのFacebook、Instagram、Twitterに接続して下さい。



From "68 Children"

INBAL ASA



Guernica Reimagined

PIERRE NAGLEY

ピエール・ナグリーは、米国オハイオ州イエロースプリングスを拠点に活動するパブリックアーティストです。

メール(pinagle@gmail.com)またはInstagram([@pie_nagley](https://www.instagram.com/pie_nagley))で連絡を取ることができます。

自由への権利 - マーティン・ルーサー・キングJR.

制作：ノーベル賞博物館、監修：アシュリー・ウッズ

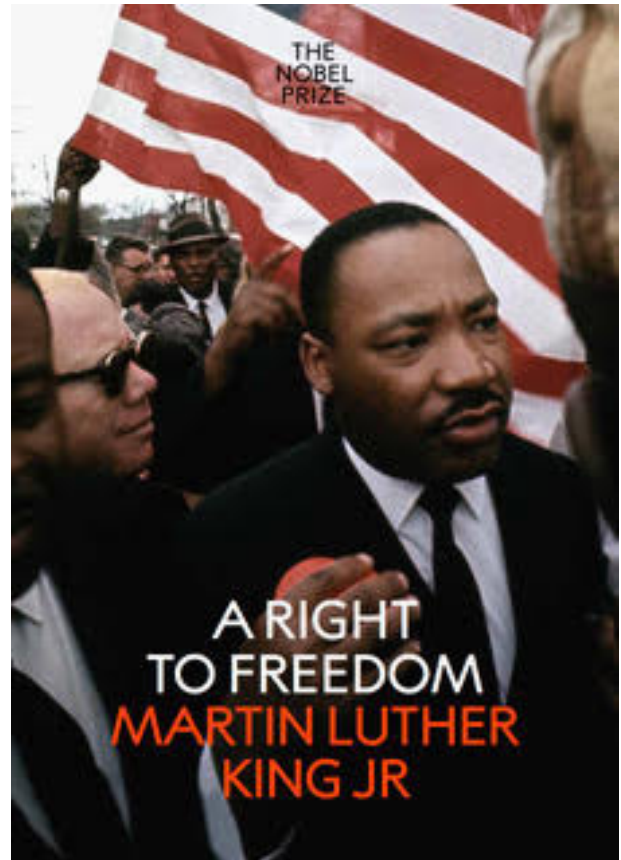
ASHLEY WOODS

キング牧師の言葉は歴史に残っています。地域の伝道師として育ったキング牧師は、何千万人もの人々にアフリカ系アメリカ人の自由への権利を支持させ、統一運動のリーダーとなりました。

しかし、キング牧師は、世界は互いにつながっていると考え、すべての人の価値が平等であること、そして普遍的な人権を求めています。「私たちは、逃れられない相互関係のネットワークに巻き込まれ、一つの運命の衣に結び付けられている。一人に直接影響を与えるものは、間接的にすべての人に影響を与える」と書いています。キング牧師の思想は、彼が生きた時代や社会をはるかに超えています。

キング牧師の「I Have a Dream」演説（1963年8月28日）から約60年が経過しましたが、キング牧師が「三悪」と呼んだ人種差別、貧困、戦争などのシステム上の問題は、いまだに私たちの社会に遍在しています。アフリカ系アメリカ人の歴史家であり、カリフォルニア州スタンフォード大学キング研究所の所長であるクレイボーン・カーソン博士が指摘するように、「キング牧師が取り組んだ問題、特に世界的な人権と社会正義の理想は、歴史上のどの時代よりも今、重要なのです。」

この展示では、1950年代から60年代にかけてのアメリカの公民権運動、特に非暴力による万人のための平等と正義というキング牧師のビジョンに焦点を当て、「すべての人間は生まれながらにして自由であり、尊厳と権利において平等である」（世界人権宣言第1条）という基本的な人権に対する人々の理解を広めることを目的としています。



また、キング牧師の娘であるバーニス・A・キング氏（アトランタのThe King CenterのCEO）は、「この展示では、母であるコレッタ・スコット・キングがアメリカの公民権運動やそれ以降に果たした重要な影響や役割など、見過ごされがちな分野にも焦点が当てられています」と述べています。

一人の人間が、20年に及ぶ平等のための前例のない戦いをいかにして導いたかというこの感動的な物語は、豊かなミクストメディアによるストーリーテリングと、歴史的な芸術品、舞台装置、小道具、音響、音楽、デジタルメディア、参加型の要素を用いたデザイン（3次元の画像を生成するような）によって命を吹き込まれています。



その中には、伝説的な牧師である Cordy Tindell "C.T." ビビアン氏のように、公民権運動の主催者や闘争に関わった人物への独占インタビュー映像も含まれています。「野戦司令官」の役割を果たしたC.T.ビビアン師や、運動の主要な支援者であるシンガーソングライター兼俳優のハリー・ベラフォンテ氏、「リトルロック・ナイン」のメンバーであるグロリア・レイ・カールマーク氏など、公民権運動に関わった人々の独占インタビューが含まれています。

また、マイクロソフト社の協力を得て、「ドリームビルダー・エクスペリエンス」と呼ばれるインタラクティブなプログラムを制作し、来場者、特に若い人たちに、より良い世界のための夢や願望を共有する機会を提供しました。このプログラムは、展示パッケージの一部として提供されています。

「自由への権利(A Right to Freedom)」という展示は、ストックホルムにある権威あるノーベル賞博物館が、キング牧師の娘であるバーニス・A・キング氏(アトランタにあるキングセンターのCEO)の協力を得て制作したものです。キング氏はこのビデオクリップで紹介されています。

この展示会の開催にご興味のある方は、キュレーターのアシュリー・ウッズまでご連絡ください。
mail@ashleywoods.com

アシュリー・ウッズ氏は、国際的に認められたキュレーター、プロジェクト・マネージャー、プロデューサーであり、ノーベル平和賞受賞者と密接に協力しながら、世界平和、人権、持続可能な開発を推進しています。前回の展示「Making Peace」は、2016年夏季オリンピック開催中のリオデジャネイロを含む、世界13都市で開催されました。
www.ashleywoods.com

写真提供：ノーベル賞博物館



王希奇画伯作『一九四六』神戸展 について

安齋育郎（国際平和ミュージアム名誉館長）

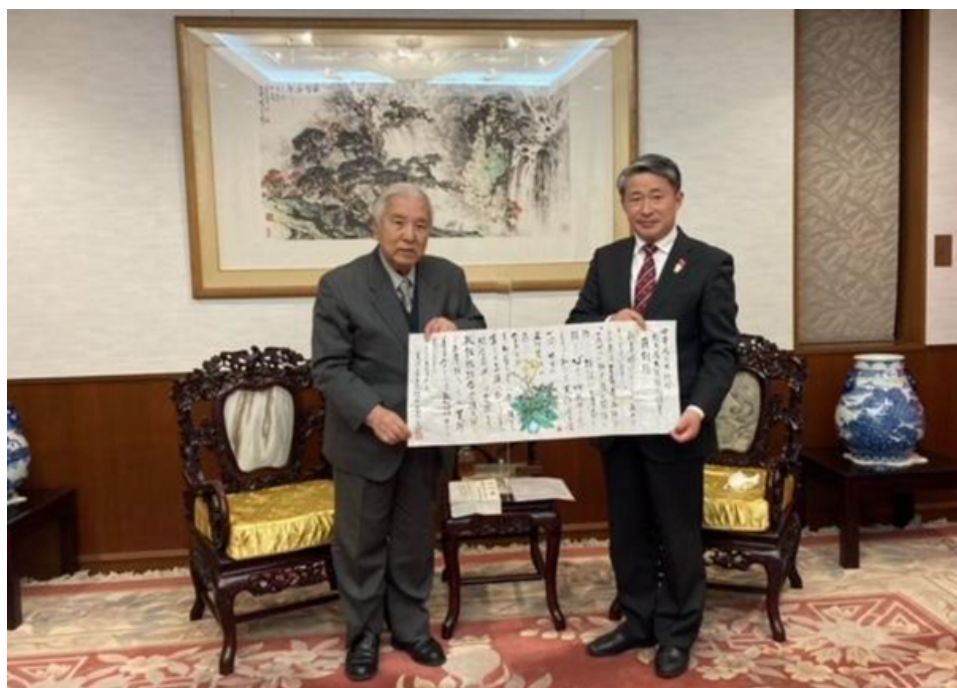
IKURO ANZAI

日中国交回復から50周年に当たる2022年の8月31日(水)～9月4日(日)、兵庫県立原田の森ギャラリーで、中国の王希奇画伯(魯迅美術学院教授)の大作『一九四六』神戸展を開催することになりました。実行委員会代表はINMP前ジェネラル・コーディネータの安齋育郎教授です。

この絵は、アジア太平洋戦争終結後に中国大陸から引き揚げる日本人の群像を描いた高さ3メートル、長さ20メートルの大作で、絵のタイトルにもなっている1946年に、105万人を超える日本人が中国・遼寧省葫蘆(ころ)島から送還された歴史的事実を描いた作品です。

中国で「葫蘆島日僑大遣返」と呼ばれているこの大事業は、連合国のポツダム宣言に伴う協議によって、中国国民政府が陸上輸送を、アメリカ政府が海上輸送を担当して取り組まれました。中国とアメリカが協力して日本人の大送還事業に取り組んだ事実は、現代の日本の若い人たちの間では広く知られておらず、国境を越えた人間愛をベースに描いた作家の心を多くの人々に伝えるために今回の神戸開催が計画されました。神戸での開催は、東京(2017年)、舞鶴(2018年)、仙台(2019年)、高知(2021年)に次いで国内5回目になります。

王希奇さんは2011年にこの作品を手がけ、完成までに7年近い歳月をかけました。



総領事(右)に絵手紙手渡した安齋育郎教授

モノクロームの作品で、敗戦という事実の中で疲弊した表情の帰還者たちが黙々と引揚船に向かって歩く群像ですが、作家は所々に鋭いまなざしの人物を丁寧に描き込むなど、戦争がもたらした悲惨な実態を人間的な心で描こうとしています。

2022年1月6日、安齋教授は中国大使館在大阪総領事館を訪れ、薛剣大使級総領事らとお会いして協力を要請しました。総領事からは「文化事業を通じた草の根の交流は極めて重要であり、今回の絵画展に中国大使館としても大阪総領事館としても協力したい」との積極的な申し出がありました。

安齋教授は、また、日本の著名な映画監督である山田洋次さんと国民的歌手である加藤登紀子さんに「一九四六」神戸展の特別サポーターに就任してくれるよう要請し、受諾されました。組織委員会は中国だけでなく、アメリカ政府にも協力を要請しつつあり、日本の厚生労働省や外務省の後援も模索しています。

安齋育郎博士は、国際平和ミュージアムの名誉館長です。



From "68 Children"

ITAY BEKIN

共鳴を求める不協和:

被爆者を記憶する時、あるいはそれは遅すぎるのか?

ロバート・コワルチェック
ROBERT KOWALCZYK



核兵器の標的はただ一つ-人類

2022年2月14日 - 世界は今、ロシアのウクライナ侵攻の可能性に備えている。米国は、バイデン大統領が、すべてのアメリカ人にウクライナから離れるよう求めながら、「事態は急速におかしくなるかもしれない」と言い、ほとんど平然と「世界大戦」について話し、反撃している。

それぞれの立場で計算されたリスクは、いずれ、あるいは急速にエスカレートし、自動的かつ自然発生的な連鎖によって、比較的平和な状態から世界規模の核戦争の可能性へと発展する可能性がある。高度なテクノロジーと極超音速巡航ミサイルの導入により、私たちはこの瞬間を迎えている。

願わくば、今からでも遅くないので、被爆者のことを思い出してほしい。最初のボタンが押された後、このようなやり取りをどのように制限するのだろうか。また、そのようなことが起こった場合、将来の歴史家は誰がそれを始めたかについて屁理屈をこねるのだろうか? 将来被爆者となる人々は、生き延びて悲惨な体験を語り継ぐことができるのだろうか。

京都市の国際的な小規模NPO「ピースマスクプロジェクト」は、日本(90)、韓国(8)、台湾(1)、米国(1)から寄せられた100枚のピースマスク(上の画像)の寄贈先として、巡回展の開催、または恒久的でふさわしい場所の提供を被爆者とその子孫に約束した。

私たちは、ピースマスクが想像を絶するものを静かに表現できる、適切な国際的な場を求めているのである。

広島と長崎のピースマスクは、広島とバンコクの国連会議場で展示されたが、上記のような被爆者との3つ目の約束は、まだ達成されてはいない。

17ヶ月のプロジェクト期間中、8歳から92歳までの被爆者とその子孫は、よく知られている「ヒバクシャ平和ミッション」に賛同し、それぞれの顔のマスクの作成に協力した。「ノーモア・ヒロシマ! ノーモア・ナガサキ! 核兵器はいらない!"

ピースマスクプロジェクトは、参加された方々とそのご家族に、光栄かつ謙虚な気持ちでいっぱいである。誰一人、非難や怒りの指をさすことなく、国家間の恒久的な平和を一番に考えているのである。私たちは、世界が過去に思いを馳せ、未来への無限の可能性を描くことで、彼らの76年にわたる祈りが現実となることを信じている。

ピースマスクプロジェクトは、いかなる企業、宗教団体とも関係がない。この記事に関するメールは、Robert Kowalczyk（または journey04@mac.com）へお送りください。

ロバート・コワルチェック：元近畿大学芸術文化学部教授、同学部国際文化学科長。現在、ピースマスクプロジェクトコーディネーター。

この記事は Transcend Media Service に掲載されたものです。

“

1945年以來、世界を原爆から守ってきたのは、特定の兵器に対する恐怖という意味での抑止力ではなく、むしろ記憶であったのだ。広島（と長崎）で何が起こったかという記憶である。

ジョン・ハーシー

John Hersey



From "68 Children"

NOMI GEIGER

アルベルト・シュバイツァー博士の平和展示会 「生命への畏敬」

クリスティアン・バートルフ

CHRISTIAN BARTOLF

1957年4月23日、アルベルト・シュバイツァー博士の「良心の宣言」がラジオ・オスロを通じて発表され、ニューヨークの「The Saturday Review」(1957年5月18日付)の17～20ページに全文が掲載されました。この核軍縮の呼びかけは、多くの国際的なラジオ局によって放送され、1日後の1957年4月24日のニューヨーク・タイムズに抜粋して掲載されました。

私たちの展示会「アルベルト・シュバイツァー博士：『人々への私の演説』-核戦争に対する責任」は、60年後の2017年4月24日に初めて開かれました。この展示会は、シュヴァイツァーのテキストに基づいており、彼の活動の努力を取り上げています。つまり、1)いかなる戦争にも原理的に反対すること、2)核兵器と核戦争に反対すること、3)生命への畏敬の念を表明するものです。

この展示会はドイツでも何度か開催され、例えばベルリン自由大学の大学図書館では、2つの展示会カタログを印刷およびPDFで発行しています（英語：<https://refubium.fu-berlin.de/handle/fub188/27820>；ドイツ語：<https://refubium.fu-berlin.de/handle/fub188/25904>）。

また、ドイツのアルバート・シュバイツァー・センター（Stiftung Deutsches Albert-Schweitzer-Zentrum Frankfurt/Main）は、このシュバイツァー平和展を多くの公共の場で開催しています。

1926年、アルベルト・シュバイツァー博士が、現在のガボンにあるランバレネの病院で書いた言葉は、彼の生命に対する畏敬の念という倫理観と、同時代のインド人の精神世界との類似性を示しています。



“

「私は、マハトマ・ガンジーに深い敬意と高い評価を送ります。私は、彼が行っていることや、彼が人々に伝えている考えに深く感動しています。私は彼と個人的に知り合いになりたいと思っています。ずっと会いたかった詩人のラビンドラナート・タゴールさんとも会える日が来るでしょうか？」

学校や大学での市民教育や政治哲学は、世界的な「平和の文化」(国連)の倫理原則に基づいて行われなければなりません。非暴力抵抗の歴史に関する私たちの展示会は、例えばロッテルダムのエラスムスやアルバート・シュバイツァー博士のようなヒューマニストやいかなる戦争にも反対する人々の声を伝えるものです。

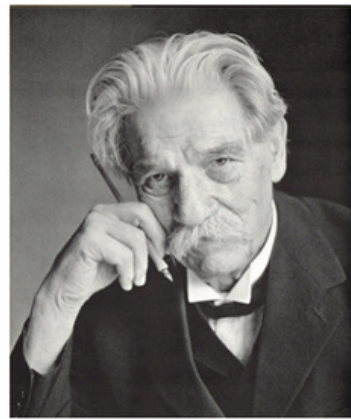
私たちは、32枚のパネルからなるこのオンライン展示を、将来の「非暴力と平和のための仮想博物館」の重要な構成内容の一つとして実施する予定です。

英語：<https://www.nonviolent-resistance.info/exhibitions/eng/schweitzer/index.htm>

ドイツ語：<https://www.nonviolent-resistance.info/exhibitions/ger/schweitzer/index.htm>

Dr. Albert Schweitzer

(14 January 1875 – 4 September 1965)



“My Address to the People” Commitment against Nuclear War

クリスチャン・バートルフ博士は、哲学博士です。1993年よりガンジー情報センター(非暴力のための研究・教育)、平和教育のための協会の会長です。

ドミニク・ミーティン博士は、ベルリン自由大学オットー・スール政治学院で市民教育学、政治学の歴史の講師です。

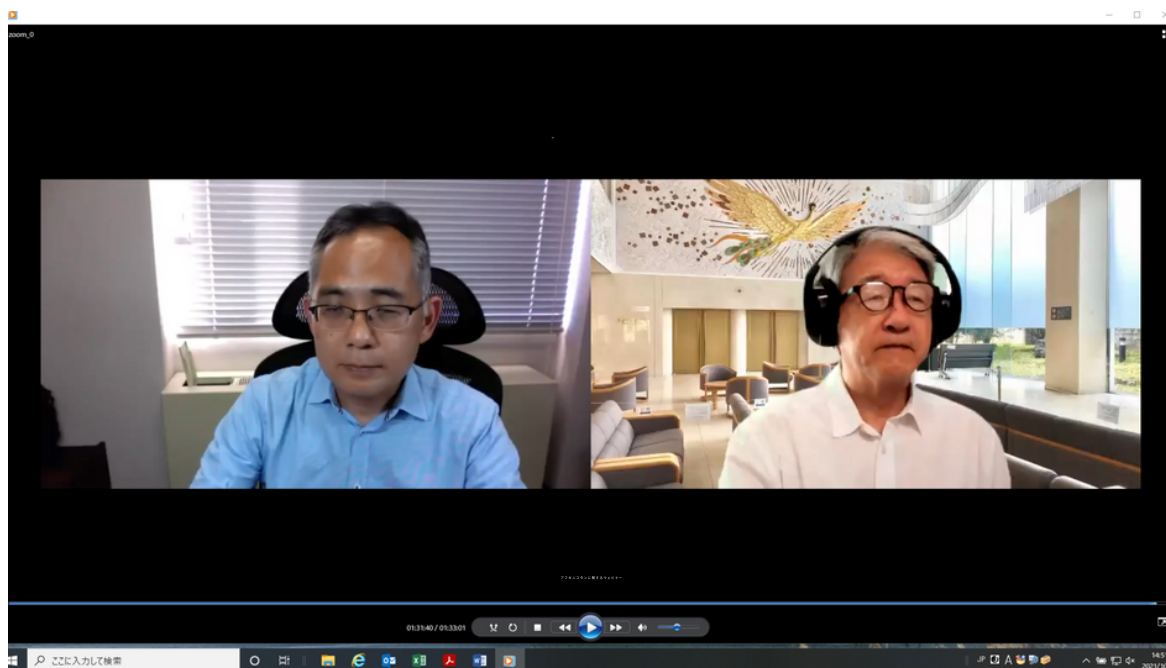
立命館大学国際平和ミュージアムの取組の ご報告

館長 吾郷 眞一

当ミュージアムは昨年春からリニューアル準備のために休館していましたが、ついにこれから一年半かけて本格的な工事に入ります。建物の内部が全面的に改造されますので、事務室も2023年のリニューアル完成まで洋館に移ります。大規模な改修となりますため、検討には実際の工事期間よりも長い時間をかけました。それは、今回のリニューアルを単なるルーティンな施設の修理や改善にとどまらず、展示構成、内容を抜本的に刷新し、全くあたらしいミュージアムを誕生させるという意気込みで検討が進行したからです。全学レベルの会議や専門家を交えた会議・打ち合わせが数えきれないほど開催され、やっと具体的な工事に入ることになりました。まだこれからも展示内容の詰めはリニューアル後の開館まで行われます。ただ、大枠は大体見えてきましたので、これまでに決まったことと、大体の完成像をかいつまんでお話したいと思います。

まず、「平和と民主主義の教学理念を具体化する教育・研究機関として、また社会に開かれ、発信する社会開放施設」としての立命館大学国際平和ミュージアムの理念は不動です。そして、加害者と被害者の両方向から戦争の惨禍を記憶し後世に伝えると同時に、平和創造への道筋を模索するという展示コンセプトも変わっていませんが、展示の方法や物理的構成は、全く新しいものとなって現れます。まず今まで地階と2階に分かれていた常設展示室が地階に統合され、空間的な断絶のない展示導線が実現されます。中野記念ホールは、そのまま1階に残りますが、企画展示室、無言館、ラウンジ・ギャラリー、事務室が同じ1階にまとめ、総合受付も中央部に設置されます。2階には収蔵庫、「ピース・コモンズ」(学習施設・学習空間)、国際平和メディア資料室、セミナー室、平和教育研究センターが配置されます。

常設展示概要としては、大きく年表展示とテーマ展示に分けられます。戦争と平和の歴史を辿る年表展示は地階常設展示場の北側と西側の壁側に展開され、今を考えるためのヒントを見つけるテーマ展示はプロローグとエピローグの間に4つのテーマ別に展開されます。そして最後に問いかけ展示として、プロローグで問いかけた戦争・平和とは?という問題に自分で向き合う機会を与えることとなります。一言でいうならば、未来の平和のあり方を戦争記憶と平和を求めた歴史、現在の課題、将来の展望をみつめる流れで考える、換言すれば戦争記憶と平和を求めた歴史から未来の平和のあり方を考える大きなストーリーライン(15年戦争を起点とするだけにとどめず、グローバルヒストリーという観点からみる)で追い、視点を深めるためのテーマ展示で補強するという仕組みになっています。いろいろな技術的工夫を凝らした年表展示と、具体的なモノの展示の往還を通じて、未来を変えていくための視座を獲得し、平和創造の主体者へと導いていくことが期待されています。



これからの改修工事の1年半、私たちにはまだまだ仕事がたくさん残っています。展示物一つ一つはまだ決まっていないからです。今までの収蔵品のある程度が再展示されることは間違いないですが、そうでないものも多く、これから収集にかかるものすらあります。休館中も情報発信は続けていかなくてはならないので、ヴァーチャルミュージアムを拡充しなくてはなりません。実際に行われていた館長講義も、ビデオに撮ってDVDの形で提供するというようなこともやっています。また、新たな教育普及ツールのすごろくの開発やオンライン講演会を開催し、ミュージアムとしてのメッセージを積極的に発信しようとしていますので、リニューアル準備だけでない追加の仕事が山積しています。

見せることを基本とする博物館を閉めるということは、私たちにとって大変な事態なのですが、コロナ禍で見学に制限が加わっていることは、ある意味では不幸中の幸いでした。さすがに2023年9月には、集団での見学が自由になっているはずですので、皆様を驚かせるようなリニューアルを実現すべく、閉館中鋭意努力してまいりますので、どうか引き続きご支援いただきますようお願いいたします。



学生スタッフ発案 すごろくゲーム
「平和LAB.(ラボ) ～戦争がなければ平和なの?～」

被爆者の覚悟

NPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会 (NO MORE HIBAKUSHA PROJECT- INHERITING MEMORIES OF ATOMIC AND HYDROGEN BOMB SUFFERERS)

事務局長 伊藤和久

2021年10月23日～11月27日、昭和女子大学の博物館で特別展「被爆者の足跡—被団協関連文書の歴史的研究から—」が開催され、全国から約1500人が来場しました。当会が所蔵する、日本被団協を中心とする被爆者運動史の整理・保存から生まれた、昭和女子大学の「戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト—被団協関連文書」は、4年間研究を重ねて来ました。特別展は、その集大成であり、70年以上にわたって被爆者が刻んできた足跡を明らかにし、戦後史に位置づけようとする画期的な試みとなりました。これまで平和運動に参加したり、原爆展や資料館などを見てきた人たちにとっても、新たな気づきや発見があり、共感と希望にあふれる声が多く寄せられました。ある被爆者の感想(要旨)を紹介します。

「あの日」から始まった被爆者の「ふたたび被爆者を世界のどこにもつくりたくない」運動は、人間の生存を否定する核兵器の非人道性を告発し、人間の尊厳を取り戻す運動へと導いた先達の強い意志を読み取れる展示でした。貫かれた強い意志と温かい人間味に満ちた人格をきちんととらえていることに学生の皆さんの的確な記述に感銘を受けました。

遡れば、1945年9月GHQはプレスコード「日本新聞規則に関する覚書」を発表し、原爆について検閲を徹底しました。原爆の人体への影響に関して医師や研究者は発表できず、個人の被爆体験や原爆について新聞記事も発行できませんでした。こうして、被爆者の存在は数年間、社会や世界から隠されました。

1954年3月、南太平洋のビキニ環礁でアメリカが核実験を行い、日本の遠洋漁船「第五福竜丸」が被災し、無線長が放射能症で死亡しました。これを契機に原水爆禁止の署名運動が広がり、翌年8月に第1回原水爆禁止世界大会が開催されました。被爆10年目にして被爆者も被爆体験と被爆者のおかれた実情を語り始め、1956年8月日本被団協を結成し、「私たちは自らを救うとともに、私たちの経験をとおして人類の危機を救おうという決意」を宣言しました。以来、今日まで65年間、被爆者は闘いつづけてきました。発足10周年を迎えた当会は、被爆者の覚悟を受け継いでいきます。

(日本被団協の動静は、

WWW.NE.JP/ASAHI/HIDANKYO/NIHON/ENGLISH/INDEX.HTMLをご覧ください。)



昭和女子大学での特別展示

ルーマニア平和博物館とウィーン平和博物館がルーマニアの ラームニク・ヴァルチャの美術館で展覧会を開催 Magdalena Butucea: ルーマニアの平和博物館創設者

"[アウレリアン・サセルドテアヌ]ヴァルチャ県立博物館は、2021年11月12日(金)12:00~13:00、美術館(Casa Simian)"にて、東南ヨーロッパ発、世界初の移動型平和博物館であるルーマニア平和博物館と平和博物館ウィーン展を開催しました。

開館式には、ヴァルチャ県の「アウレリアン・サセルドテアヌ」県立博物館館長のクラウディ・トゥルゲア氏、ルーマニア平和博物館設立者のブツェア・マグダレナ・クリスティーナ氏が出席しました。美術館の展示は、一般市民はもちろんのこと、特に若い世代、つまり児童・生徒・教員を対象としています。その美術館では、約2ヶ月間、両博物館の展示を行いました。

ルーマニア平和博物館は、東南ヨーロッパで最初の平和博物館であり、世界初の移動式平和博物館であり、平和博物館国際ネットワークの重要な一部です。博物館の移動というアイデアは、創設者であるマグダレナ・クリスティーナ・ブツェアのもので、彼女は世界にできるだけ多くの平和教育を広めたいと考えていました。彼女は、2019年4月、平和と人権のための国際活動家としての活動全体が評価され、ウィーン平和博物館(オーストリア)から「平和のためのヒーロー」賞、2019年9月には、国や人種、宗教の壁を越えた国際的なプロジェクトとみなされるピースミュージアム・ルーマニアの設立に対して、INMP(国際平和博物館ネットワーク)から「承認書」を受け取りました。マグダレナ・C・ブツェアは、「私にとっての平和とは、原則と実践として、非暴力を認めることです。」と述べています。

ルーマニア平和博物館は、平和、自由、人権の擁護と、平和の概念に不可欠な持続可能な開発の概念に貢献した世界有数の人物を紹介することで、平和と人権を推進しています。このように、持続可能な開発の戦略は、平和の概念の不可欠な一部となるのです。ルーマニアは、国連と欧州連合(EU)の加盟国として、2030アジェンダと17のSDGsの実施を支援し、それぞれ経済、社会、環境の3本柱でルーマニアの発展を約束しています。これは、公正な方法とクリーンな環境の活動における市民のための戦略です。

ルーマニア平和博物館には、展示や人物紹介のほかに、児童・生徒や関心のある一般市民を対象としたワークショップがあります。ワークショップは、創設者のマグダレナ・ブツェアがサポートし、平和の概念、戦争の概念、人類の歴史上知られている戦争の種類を詳細に説明することが主なテーマとなっています。ワークショップは対話形式で行われ、参加した一般市民は議論や討論に参加することができます。



平和教育は、尊重、自由、法律、平和、平等、連帯、自尊心、他者への尊敬、地球規模の問題への関心、批判的アプローチ、社会的責任といった価値を促進することを目的とした、前向きで統合的な教育的アプローチを定義しています。

平和教育の目的：地域や世界の重要な問題を解決するための雇用と協力を促進し、持続可能な開発のための前提条件である平和を促進・維持し、平和教育活動への若い世代、家族、教師、コミュニティ全体の参加を刺激すること。

ルーマニア平和博物館は、これまでにルーマニアとヨーロッパのいくつかの都市（ラムニク・ヴァルチャ、シビウ、アルバ・ユリア、ブカレスト、クラヨーヴァ、ウィーン）で展覧会を開催してきました。

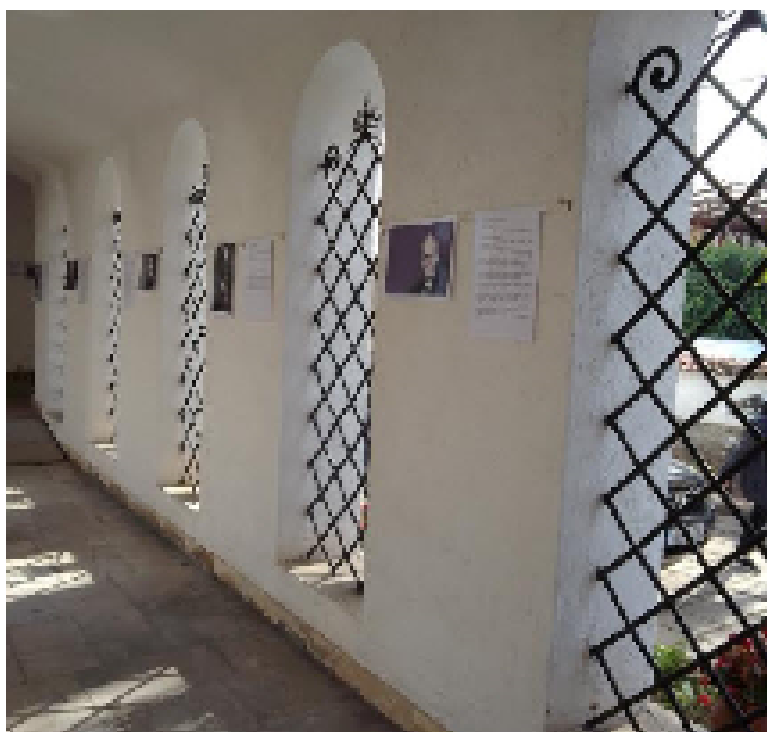
ウィーン平和博物館は、ウィーンおよび世界各地の平和活動に関する物語を研究し、普及させることを目的としています。

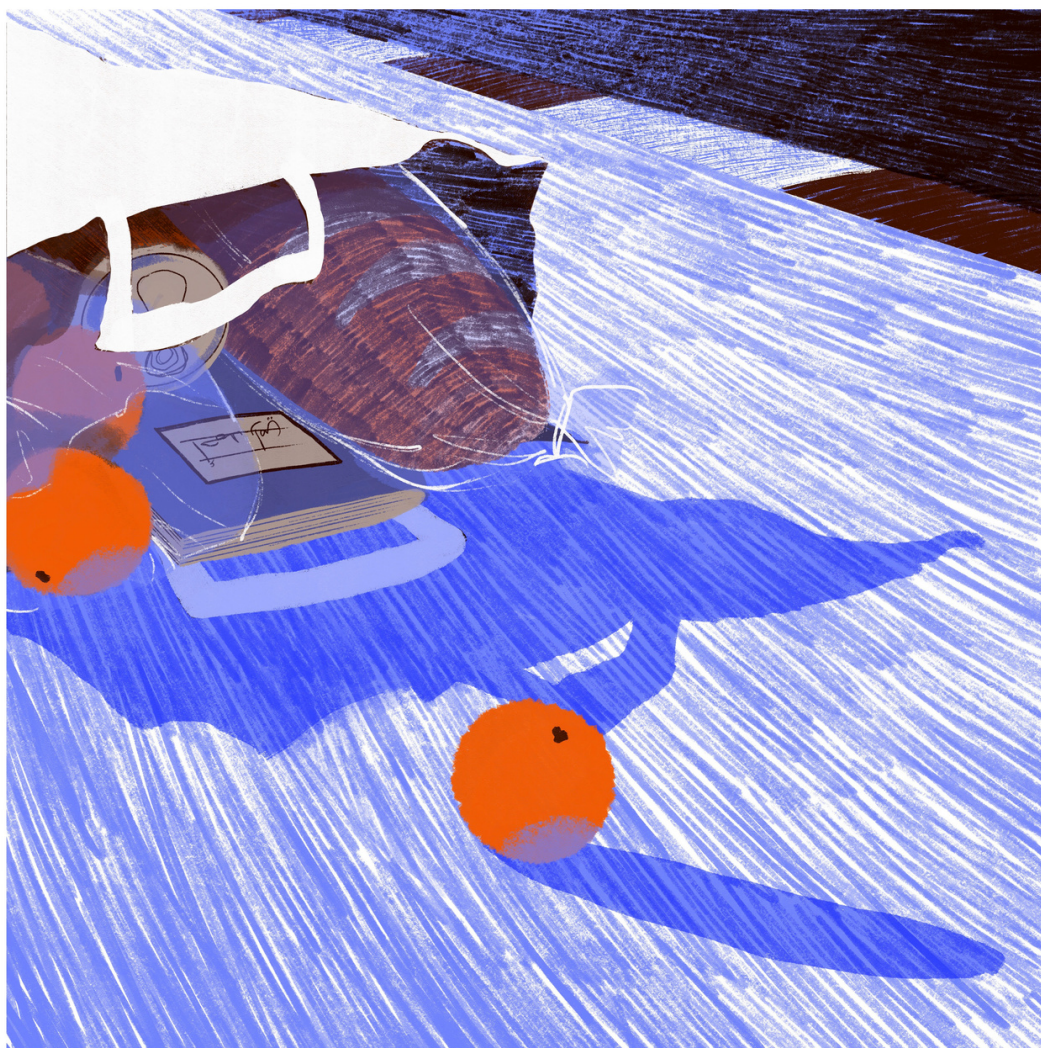
ウィーン平和博物館は、ピースヒーローの人生を通じて、来館者に平和について教育しています。ピースヒーローとは、偉大な勇気と無私の精神を示し、世界をより良く、より平和な場所にするために懸命に努力した人物のことです。私たちは、このようなピースヒーローの物語を紹介することで、来館者が日常生活の中で平和に向けて努力するよう教育・啓蒙しています。ウィーン平和博物館は、平和を愛する人々の出会いの場でもあり、尊敬に満ちた平和的で教育的な会話をするための最適な情報源です。

また、ウィーン平和博物館は、私たちのミュージアムに皆様をお迎えし、ピースヒーローの物語を共有できることを楽しみにしています。ミュージアムはBlutgasse 3, 1010, Wien Inner Stadtでご覧いただけます。月曜日から土曜日まで、11:00から17:00まで開館しています。平和博物館の見学は無料です。誰でも中に入って、私たちの物語を学ぶことができます。

平和博物館ウィーンは、ウィーンと世界の平和活動に関するストーリーを研究し、普及させることを目的としています。ウィーン平和博物館は非営利団体です。私たちの目的は、平和のヒーローたちの人生を共有することによって、皆さんに教育とインスピレーションを与え、皆さんが"平和のために何ができるか"を自問できるようにすることです。私たちのチームは、平和への情熱を共有する世界各地のメンバーで構成されています。アメリカ、ヨーロッパ、アジアにある私たちの拠点もぜひご覧ください。

ウィーン平和博物館が大切にしていることは、教育、人間性、勇気、団結、尊敬、博愛です。





From "68 Children"

Yael VOLOVELSKY

LAJI 主催：平和博物館における教育に関する対話 (2022年3月7日開催)

ウェビナー

3月7日2022-17時(MT GMT-7)、日本の博物館の平和への視点、京都と福島での新しい展示、そして今日の博物館で平和を教える展示物、芸術品、神聖な人間の物語について話し合うためにご参加ください。ロスアラモス日本研究所は、立命館大学国際平和ミュージアム、平和のための博物館国際ネットワーク、そして福島にある日本の新しい平和博物館「伝言館」から、日本の博物館のリーダーたちと平和について対話するために、あなたを招待します。

LAJI創設者のジュディス・スタウバー博士とLAJI理事長のクリフトン・トルーマン・ダニエル(トルーマン大統領の孫)は、京都の仲間を歓迎し、講演者と対話することを光榮に思っています。

- 吾郷真一教授
(国際平和ミュージアム館長)
- 安齋育郎博士
(科学者、国際平和ミュージアム名誉館長)
- 山根和代博士
(平和博物館研究者、LAJIグローバルアドバイザー)
- 兼清順子氏
(国際平和ミュージアム学芸員)

LAJI.USで参加登録する

あなたの寄付がLAJIのプログラムをサポートします。
オンラインライブの24時間前に、会話に参加するためのリンクが送られます。

r

PEACE MUSEUMS

LOS ALAMOS-JAPAN INSTITUTE
INCLUSIVE CONVERSATIONS

MARCH 7 5PM US MT
MARCH 8 9AM JAPAN

Speakers: Myouji Makoto, Yasuoka Yuuro, Yamane Kazuyo, Kaneko Juniko

Logos: Los Alamos National Laboratory, Peace Museum, International Network of Museums for Peace, LAJI.US

カナダでのサマーインターンシップ参加者募集 (オンラインまたはオンサイト)

(Online or On-site)

ALPHA EDUCATION

ALPHA Educationはカナダの登録慈善団体で、過去と現在に起こった人類の残虐行為とその共通性に言及しながら、人間性と平和教育を育むことを使命としています。ALPHA Educationは、世界初のアジア太平洋平和博物館をアジア以外の地域で建設中です。

サマー・インターンシップ・プログラムは、中等教育終了後の学生を対象に、平和と人間性の教育を推進する取り組みです。このプログラムは、提携する大学の認定プログラムの学生や、学際的な研究のレンズを通してアジアにおける第二次世界大戦の歴史に対する批判的理解を追求することに関心のある学生を対象にしています。

プログラム参加者は、8週間のフルインターンシップ、またはラーニングモジュールのみを選択することができます。

フルインターンシップのプログラムは、3つの主要な要素で構成されています。

1. 学習 - アジアにおける第二次世界大戦の歴史について批判的に検討する5つのレッスンと、インターン生の自主研究ベースのプロジェクトを支援するワークショップに参加することが求められます。非同期学習のために、レッスンのトピックに関連した読書とビデオ鑑賞が提供されます。各レッスンには、ライブのディスカッションセッションと、クイズ、ピアディスカッション、課題などのオンラインアクティビティも含まれます。

2. 体験学習 - インターンシップの参加者は、ALPHA Educationの教育カリキュラムまたはアジア太平洋平和博物館の展示内容のいずれかの枠組みで、研究ベースのプロジェクトに取り組むことが要求されます。

3. プロジェクトの成果 - インターンシップの参加者は、インターンシップの終了時に、リフレクション、プロジェクトのサマリー／ペーパーを提出し、プレゼンテーションを行うことが要求されます。聴講のみの参加者は、体験学習には参加せず、プロジェクトの成果物も提出する必要はありません。しかし、フィードバックを送ることは歓迎されます。

サマー・インターンシップ・プログラムは、学生が歴史的・批判的思考を身につけ、公平性、人間性、世界平和のために前向きな変化をもたらすよう、彼らを鼓舞するのに役立ちます。過去のインターン生は世界各地から集まり、知識、洞察力、情熱を仲間と共有するまたとない機会を大切にしています。

応募は、www.alphaeducation.org をご覧いただくか、info@alphaeducation.org までメールでお問い合わせください。





From "68 Children"

YANA BUKLER

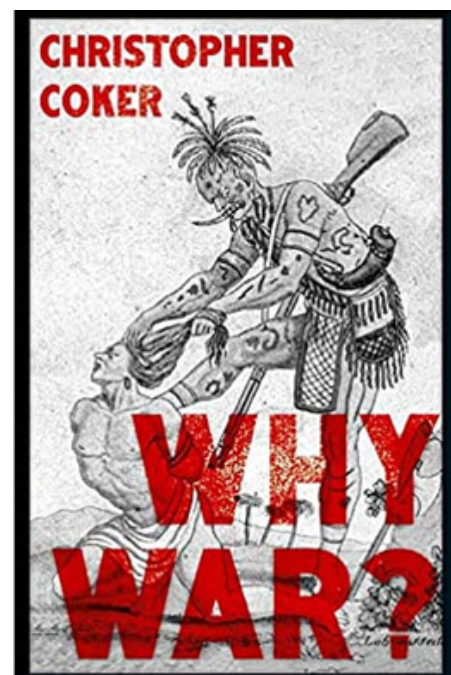
なぜ戦争なのか? クリストファー・コーカー著 書評: ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン

Book Review by Peter van den Dungen

女性の読者の『なぜ戦争なのか』に対する短くて鋭い答えは、「男性のせいでしょう!」というものでしょう。もう一つの答えは、「このような本に書かれている意見のせい!」である。クリストファー・コーカーは「戦争の謎」(4)に言及し、「人間は逃れられないほど暴力的である」(7)、「戦争は人間を人間たらしめている」(20)、「我々の起源をどこまで忘れられるかには限界があるので、我々は決して戦争から逃れることはできない」(43)と主張する。なぜ戦争なのか』は、1933年に国際連盟の国際知的協力研究所から出版された、アルバート・アインシュタインとジークムント・フロイトの同様のタイトルの書簡をすぐに思い起こさせるが、コーカーはその書簡には言及していない。また、C.E.M.ジョードの『Why War? (1939)でもそうである。ジョードの見解(コーカーの見解とは異なる)は、この1939年のペンギン・スペシャルの表紙に大胆に述べられている。「私の主張は、戦争は避けられないものではなく、人間が作り出したある種の状況の結果であり、人間は疫病が栄えた状況をなくしたように、その状況をなくすることができるのである」と。同様に不可解なのは、この問題に関する古典であるケネス・N・ワルツの『人間、国家、戦争』([1959]2018)への言及がないことである。国際関係論の卓越した理論家であるワルツは、戦争の3つの競争的な「イメージ」を特定し、問題を個人、国家、国際システムのそれぞれの本質的な特徴の中に置くことで、この問題にアプローチした。ワルツは、以前のルソーのように、国家間の戦争は防ぐものがないために起こると結論づけた(中央政府のおかげで国民国家内は比較的平和であるのに対し、グローバルな統治システムがないために国民国家間では無秩序な状態が続いていると対比させている)。

19世紀以降、国家の相互依存関係が強まり、戦争の破壊性が高まったことから、第一次世界大戦後の国際連盟や第二次世界大戦後の国際連合など、グローバルな統治機構を構築することで戦争の発生を抑制しようとする試みが行われてきた。ヨーロッパでは、戦争を克服するための100年来の計画が、欧州連合(EU)や他の地域組織の誕生につながるプロセスにおいて、少なくとも部分的には実現された。LSEの国際関係学の教授を退任したばかりのコーカーにしてはかなり不可解なことだが、コーカーの戦争に関する説明は、国家の役割や国際的な統治の欠陥を無視して、個人だけを考慮している。...

この書評を読み続けるには、[ここをクリック](#)してください。



London Hurst, 2021. (256 pages)

ISBN 978-17-87383-89-0

未来のための種まき： 建設的非暴力行動の力の探求 アンドリュー・リグビー

ANDREW RIGBY

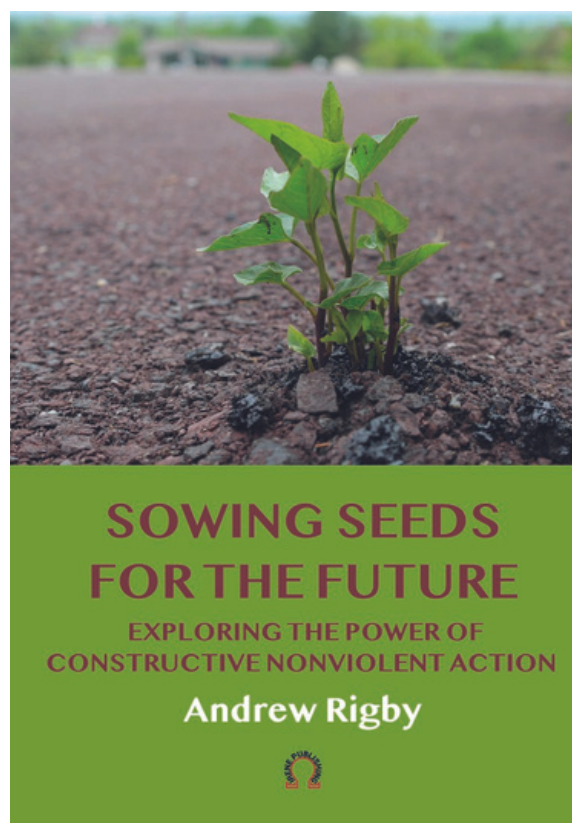
本書では、アンドリュー・リグビー (Andrew Rigby) が、個人的な体験談や考察と厳密な分析を織り交ぜながら、変革のための建設的な非暴力行動の重要性と限界を探っています。この活動の根底にあるのは、「今」未来を創るという「前兆」のようなものであり、「今」ではなく「これから」もっと広い範囲で実現したい価値観や関係性を自らの活動で具現化しようとするものなのです。

本書の核心は、非暴力的な行動様式として軽視されがちな方法を追求するためのさまざまな文脈についての広範なレビューである。読者は、著者の案内で、さまざまな魅力的な事例研究を通して、素晴らしい発見の旅へと誘われます。

世界が危機に瀕している今、この本は、地球上の持続可能な生命の未来のために必要な価値観と変化を例示する積極的な建設的行動を、人々に促す説得力のある事例となっています。

アンドリュー・リグビーは、英国コベントリー大学の信頼・平和・社会関係センターの名誉教授です。

本の詳細については、
<https://irenepublishing.com/?product=sowing-seeds-for-the-future-exploring-the-power-of-constructive-nonviolent-action> をご覧ください。
直販の場合、著者の連絡先は andrewrig@gmail.com です。



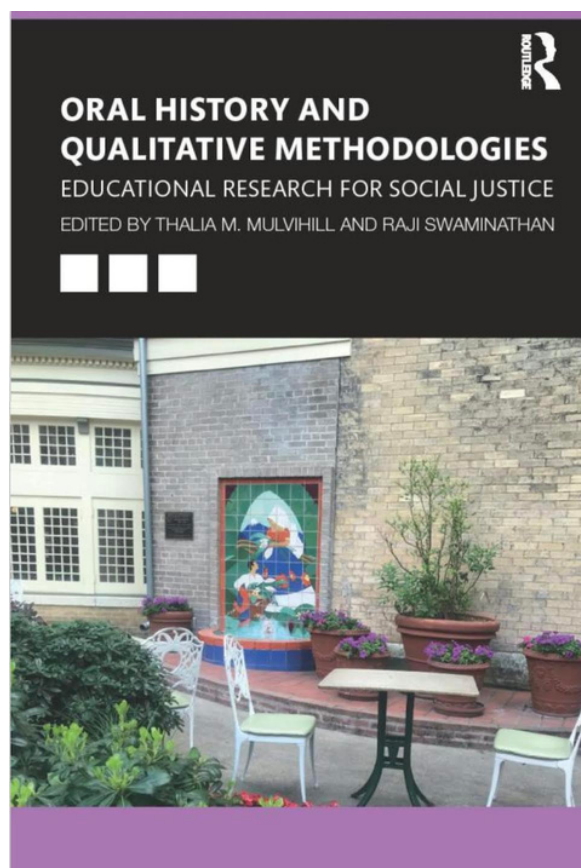
Sparsnas, Sweden: Irene Publishing, 2022.
(247 pages)
ISBN: 978-91-88061-54-6

記念博物館でのオーラルヒストリー

Roy Tamashiro ロイ・タマシロ氏による章について

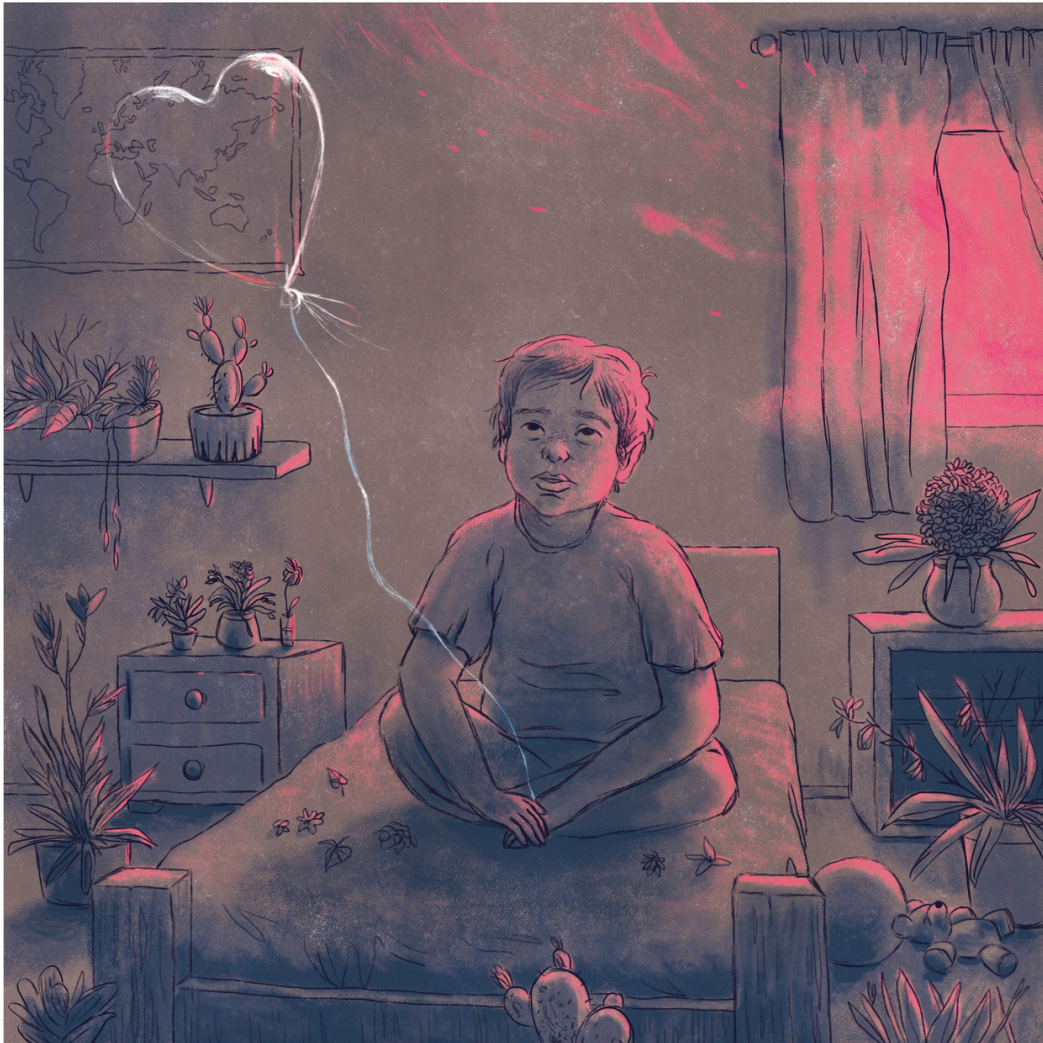
ロイ・タマシロ氏は、社会正義のためのオーラル・ヒストリー研究に関する本の一章で、平和博物館、記念館、そして深い苦しみのあった様々な史跡で語られ、展示されている物語の中に人生の知恵の宝を発見したことを執筆しています。そこには、微妙な歴史的意味、人間の本質についての洞察、そして現在と未来の人間の可能性についてのビジョンが示されています。この章では、博物館学、平和教育、社会正義、歴史学などの社会科学分野の研究者が、オーラルヒストリーや証言者の語りを扱う際に役立つガイドラインも掲載されています。

『オーラル・ヒストリーと質的方法論：社会的正義のための教育研究』（Thalia M. MulvihillとRaji Swaminathan編、Routledge、2022年2月）の中で、「Layers of Oral Histories at Memorial Museums: Chronicles About Who We Are and Who Are Likely to Become（記念館におけるオーラル・ヒストリーの層：私たちが何者で、何者になる可能性があるのか）」と題された章をご覧ください。



Routledge, February, 2022. (278 pages)
ISBN 978-03-67649-66-1

この本は、出版社(www.routledge.com)およびamazon.comで購入できます。



From "68 Children"

DAN SARID

編集チーム

編集長: Kya Kim キヤ・キム

編集者: Lucy Colback ルーシー・コールバック

編集者: Robert Kowalczyk ロバート・コワルチェック

レイアウト (pdf) Kya Kim キヤ・キム

レイアウト (web) Mona Badamchizadeh モナ・バダムチザデー

ソーシャルメディア: Mari Kumura マリ・クムラ

INMP 事務局 Kazuyo Yamane 山根和代

技術面での助言者: Roy Tamashiro ロイ・タマシロ

日本語版編集者: 安齋育郎、山根和代

日本語版翻訳協力者: 赤松敦子、山根和代

編集に興味がある方は、下記のメールアドレスにご連絡下さい。



次号について

#37号

原稿の締め切りは、2022年7月1日です。

英文では多くて500語

出版物やイベントのお知らせ：250字以内

芸術作品、詩、写真も歓迎します。

送り先: news.inmp@gmail.com

EMAIL

news.inmp@gmail.com

WEB

<http://museumsforpeace.org>



@museumsforpeace



@inmp_museums_for_peace



@museumsforpeace

INMP通信を読みたい方は下記を
クリックして下さい。

<https://forms.gle/jdxR5mng3d7qgK1v7>

INMPについて

平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）は、平和な世界の構築に取り組む博物館と関連プロジェクト、そしてそれらを支援する組織と個人の世界的なコミュニティです。私たちは、平和のための教育を推進し、平和の文化を構築し、地球規模の環境・平和を促進するために、平和博物館（および関連組織）間の知識、資料、優れた活動実践を明らかにし、共有し、普及させるために活動しています。

本号の記事は著者の見解を示すものであり、必ずしも編集チームや「平和のための博物館国際ネットワーク」のメンバーの見解を示すものではありません。

なお日本語版には、英語版に掲載されていない記事がありますのでご了承下さい。